

## ずいそう

## 豊かさとは

市川 敏夫



誤解を恐れずに言えば、究極の「豊かさ」とは働かないでよい暮らしができることかもしれません。しかし、我々日本人には違うようです。衣食住は足りているのに、いつまでたっても働き過ぎをやめられません。働き過ぎることが人としての義務であり責任であるかのように。それは働く目的を見失っているせいではないでしょうか。そしてきつとこんな状態では、どれだけ時間があっても、どれだけお金があっても、満足に自分を楽ませることはできないでしょう。

今の日本では人々が飢えに苦しむことは考えられません。食料に限らず、豊富な工業製品や多種多様なサービスが存在し、物質面で豊かになったことは確かです。その背景には経済の発展があることも間違いありません。しかし、経済の発展成長が必ずしも豊かさに繋がらなくなったと人々が思い始めています。公害などの環境破壊もそうですが、我々の文化や価値観にかかる問題です。

幸せを求め、知恵と努力で作った社会が、幸せどころかたくさん不幸を産み出しています。とりあえず経済が豊かになれば幸せになれると経済の発展を目指しましたが、いつの間にか目標が「豊かさ」から「経済成長」に変わり、結果がすべてで、プロセスを無視した手段を選ばない競争状態になりました。そのつけがあちこちで出ています。

働き盛りの中年層はむろん、若いサラリーマンやOLたちの鬱（うつ）が激増し、労災認定もかつては怪我が対象として多かったのに、心身症や神経症など心の疾患が多くなってしまいました。この社会の流れは変えようもありませんが、その中であって、どうしたら豊かさを得られるのでしょうか。

成熟した欧米人のように働いてお金が貯まったら、ヴァカンスを楽しんだり、引退して人生を楽しもうという生き方があります。しかし、日本はそういった考え方がまだまだ少ないですし、老後の不安もありそれをよしとしない環境です。

豊かさをお金が貯まること、高級品を集め贅沢な暮らしをすることとしたならば、切りがなくいつまでも満足感が得られず働き過ぎをやめられません。確かに、お金はたくさんあった方が良く、自由な時間もたく

さんあった方が良く・・・正直な気持ちはそうです。がしかし、それはまるで海水でのどの渇きをいやすに等しく、際限のないものです。

そもそも、現代社会はこんなに便利になって大抵の欲しい物は手に入れたのではないのでしょうか。人が生きてゆくために本当に必要なものさえあれば他はあってもなくてもよい物ではないか。そう考え直せば、できるだけお金で買える楽しみは排除し、いかにして、貨幣経済にまきこまれない楽しさや喜びに豊かさを見いだすかが我々の目標となるはずです。

日本には「起きて半畳、寝て一畳、天下取っても二合半」ということわざがあります。必要以上のものを望まず、満足を知ることが大切である。という意味合いのようです。自分自身をしっかりと見つめる大切さ、を教えてくれる言葉です。

よって、ここで豊かさの定義を見直すべきかと思っています。豊かさとはお金や物に囚われず辛い労働から解放されたところに存在し、人と比べた「相対的」なものではなく、自分の中にある「絶対的」なもので決まるものだと思うのです。

日本において、江戸時代は限りある資源を循環させて、廃棄物をほとんど出さない、使えるものは徹底して使う理想に近い循環型社会が成立していました。幕末に日本を訪れたヨーロッパ人はその循環型社会に感動して自国の環境社会を育てていったと言われます。しかし、明治維新から日本は欧米の先進的な工業社会に憧れ大量生産・大量消費の社会へと変貌して、日本人の無駄を出さない暮らしぶりは一変しました。この皮肉な出会いは日本とヨーロッパの環境意識の格差を生み、今のゴミだらけの日本を作ってしまった。我々日本人は豊かさの代償としてこんな状況を本当に望んでいたのでしょうか。豊かさを手に入れるために必死で働いているうちに無くしてしまったものがたくさんある気がします。

その無くした物とは、いわゆる近代化以降、高度成長期までの一般市民社会がつくり出した、相互扶助の精神や市民としての義務感といったものに支えられた地域社会、そこに属しているという安心感、幸福感だったのではないのでしょうか。